

IV. 英語教育研究

目 次

- 1 はじめに
- 2 『We Can!』の活用に向けて ～4年生の実践から～
- 3 「やってみよう」からスタートした外国語活動
- 4 表現の意欲を引き出す外国語活動をめざして
～「知らない言葉」から「使ってみたい言葉」へ～
- 5 「パフォーマンステスト」の実施と評価
～立体的な評価をめざして～
- 6 文字指導を続けて見えたこと
- 7 算数の時間に無理なく英語
～外国語活動の時間以外の外国語活動～

1 はじめに

1 英語教育研究会について

新学習指導要領に小学校の外国語活動・外国語科が教科として明示され、小・中学校における外国語教育の授業づくりや連携のあり方が大きく変わることになった。そこで、英語教育研究会では、新学習指導要領に対応する授業実践について、関西大学外国語学部竹内理教授の指導助言のもとに研究に取り組んだ。

2 研究テーマ

全体テーマ：「新学習指導要領に対応する授業実践の研究～授業づくりから評価まで～」
各研究員の研究テーマは下記のとおりである。

西村 美里	『We Can!』の活用に向けて ～4年生の実践から～
岡坂 洋平	「やってみよう」からスタートした外国語活動
吉田 元樹	表現の意欲を引き出す外国語活動をめざして ～「知らない言葉」から「使ってみたい言葉」へ～
広瀬 典子	「パフォーマンステスト」の実施と評価 ～立体的な評価をめざして～
北村 花菜	文字指導を続けて見えたこと
竹内 智哉	算数の時間に無理なく英語 ～外国語活動の時間以外の外国語活動～

3 活動概要

英語教育研究員連絡会

月に1回程度集まり、竹内教授の助言のもと研究を進めていった。

- 第1回：英語教育研究会について
- 第2回：各研究員による今年度の目標（研究テーマ）の設定を報告
- 第3回：各研究員の研究テーマ及び進捗状況の報告
- 第4回：各研究員の研究テーマ及び進捗状況の報告及び講師による指導助言
- 第5回：教育センターフォーラムリハーサル
- 第6回：教育センターフォーラム
- 第7回：1年間のまとめ

教育センターフォーラム

平成30年2月21日（水）に開催された第5回茨木市教育センターフォーラムにおいて、4名の研究員が発表を行った。

2 『We Can!』の活用に向けて～4年生の実践から～

西村 美里

1 はじめに

校内の外国語担当者として外国語活動の教科化に焦りを感じているとき、同時に英語教育研究員としての活動が始まった。ここでは、平成30年度よりスタートする新教材『We Can!』の活用に向けて、4年生で行った授業実践を報告する。

2 取組みについて

(1) 『Hi, friends! 1』と『We Can! 1』を比較して

今回の実践では “What would you like?” の表現を指導した。同じ表現を取り扱う単元を、2つの教材で比較したものが以下の表である。

	Hi, friends! 1	We Can! 1
単元	Lesson 9	Unit 8
単元目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 欲しいものについて丁寧に積極的に尋ねたり答えたりしようとする。 ・ 欲しいものについての丁寧な表現の仕方や尋ね方に慣れ親しむ。 ・ 世界の料理に興味をもち、欲しいものを尋ねたり言ったりする際、丁寧な表現があることに気付く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 家族の呼称や、丁寧に注文や値段を尋ねたり答えたりする表現を聞いたり言ったりすることが<u>できる</u>。また、簡単な語句を書き写すことが<u>できる</u>。 ・ 丁寧に注文を尋ねたり答えたりして、自分の考えを伝えあったり、簡単な語句を推測しながら<u>読んだり</u>する。 ・ 他者に配慮しながら、丁寧に注文を尋ねたり答えたり、メニューについてまとまりのある話を聞いたり、感想を伝え合ったり<u>しようとする</u>。
語彙数	26 (飲食物)	35 (飲食物、家族、数)
会話例	What would you like? I'd like pizza and milk. OK, pizza and milk? Yes, please.	What would you like? I'd like pizza and milk. <u>It's for my brother.</u> (This is for my brother.) <u>How much?</u> <u>It's 970 yen.</u> Here you are. Thank you.

取り扱う語彙数や会話のターン数が増加し、複雑になっていることがわかる。単元目標も「話すこと」「聞くこと」に留まらず、「読むこと」「書くこと」の内容が加わっている。

(2) 児童の実態を踏まえて

本校の4年生は、NETによる授業を年間11時間受ける計画になっている。その実態を踏まえ、当初は『We Can! 1』の内容を実践しようと考えていたが、今回は『Hi, friends! 1』の内容に絞って学習することにした。実際の授業は、45分の授業を3回、15分のモジュール学習を1回行った。キーワードゲーム等のアクティビティを行うことで語彙の定着を図り、コミュニケーション活動として、店員とお客さんになり切ってロールプレイに取り組んだ。回数を重ねるごとに、明らかに語彙の定着が見られたが、会話形式になると、途端に何と云ってよいのかわからなくなる児童も見られた。『We Can!』における会話のターン数を想像すると、今以上に混乱が起きることが予想された。

3 取組みを終えて

(1) 新教材『We Can!』活用のポイント

教材研究を通して『We Can!』のレベルの高さを改めて実感した。しかし、来年度この内容をすべてクリアしなければならないわけではない。新教材の活用には、以下のポイントが挙げられる。

- 平成30年～31年の移行期間は、児童の実態に合わせて『Hi, friends!』と『We Can!』の両方を活用することが前提とされていること

- 『We Can!』は、3・4年生で合計70時間の外国語活動を経験してきた児童が活用することを想定された教材であること

今回の4年生の場合、現時点で『Hi, friends!』のLesson 9を学習したことにより“**What would you like?**”の表現は理解している。したがって、来年度は『We Can!』のUnit 8が学習可能というわけである。

(2) 成果と課題

今回の実践を通して、語彙の定着には繰り返し学習が効果的であることを改めて実感した。週に1回の45分授業に加え、間にモジュール学習を入れ込むことも効果的であった。また、“**What would you like?**” “**I'd like~**”の表現についてもチャンツを繰り返すことで次第に定着した。しかし、先述したように、いざコミュニケーション活動となると、さっきまで言えていた表現が言えなくなる実態もあった。今回の設定では、子どもたちから「英語で伝えたい・話したい」という思いをうまく引き出すことができていなかったことが、その原因と考えられる。「必然性のある活動」を取り入れることで、活動一つひとつに意味を持たせ、自然と英語を引き出す仕掛けづくりをしなければならないと改めて感じた。

4 終わりに

新教材の研究を通して、これからの外国語教育について考えることができた。学習内容や時間数の増加など変化する部分もあるが、子どもたちが外国語に慣れ親しみ、進んで使いたくなるような授業づくりをめざす部分は変わらない。より一層、充実した外国語活動が実践できるよう、校内でも引き続き研究を続けていく。

3 「やってみよう」からスタートした外国語活動

岡坂 洋平

1 はじめに

外国語活動はNET任せ…だった、何をどう教えていいかわからない私が、「やってみよう」を合言葉に、手探りの中で取り組んできたことを報告する。また、新学習指導要領の実施に備えて、中学年で何をすべきか、何ができるのかを中心に研究した。現時点で文部科学省が想定しているカリキュラムに準じた内容で公開授業も行い、高学年での文字指導に向けて、4年生でできるステップの模索にも踏み込んだ。

2 本校の様子

私の着任以前は外国語活動を推進する校内の研究部会が存在したが、一定の役割を終えたという判断から、組織としてはなくなっていた。その時には共通理解をもってある程度充実した教具もあったようだが、その後は大きくは引き継がれず、学校体制としては正直に言って、外国語活動が熟成しているとは言い難い状況であった。その中で外国語活動の推進担当を担うことになったが、自分自身、前任校でもNETの外国語活動に委ねて特に研究することはなかったため、苦手意識が非常に強く、何をしたいのかわからなかった。

3 「やってみよう」からスタート

昨年度、LEEP研修を受けさせていただく機会を得、まずはやってみなければ始まらないと感じ、講師であった新家先生の技をそのまま「やってみよう」とスタートした。見様見真似であったが、子どもたちの反応はよく、積極的に活動して、発声も進んで行う姿が見られた。ほんの少し、自信を持てた瞬間であった。

このことから、まずは外国語の授業を行う上で有効な「ネタ」を身につけることが肝要であると感じ、歌やゲーム、読み聞かせなどを積極的に学ぶようになった。それも、本や楽譜を手に入れることなく、他の教員が行っている授業やレクチャーを見て、使い方をできるようにした。そして校内で、他の教員に見てもらおう形で実際にやってみてから、授業で行うようにした。

4 校内に返す

このように、自分が身につけた技能は、実際に自分がやってみた経験で得たものなので、校内研を開き、他の教職員にも「実際にやってみる」経験をしてもらい、自分がこの単元で授業を行うなら、と想定して、短時間で簡易なものではあったが、授業プランを練ってもらった。同時に、事前にアンケートを取り、なにが外国語の授業を行うことを躊躇させるハードルかを知り、それをクリアできることを目指した、「豊川小学校に、いま、必要な研修」を行うことを大切にして研修を行った。

5 今年度、4年生での取り組み

4年生の担任として、朝と帰りの挨拶、日時の読み上げ、健康観察などを英語で行うことや、教室の戸に英単語を貼り付け、入退室時にそれを唱えないと通れないなど、様々な試みを行っている。特に健康観察においては、段階を踏んでステップアップをしており、現在はレスポンスを大切にしつつ、他の児童が何を言うかを聞いていないと反応できないようなゲーム性を取り入れて、相互の様子を確認し合うという、健康観察の意義も大切にしている。

6 公開授業の様子

What do you want? … 「お店ゲームをしよう」と、「夢のパフェをつくろう」

昨年2月時点で文部科学省が示した2020年からのカリキュラム案を見ると、4年生の秋にはこの内容が配当されていたので、実際にやってみることにした。

- ① NETに先行的に果物の名前を教えてもらう。
- ② お店ゲームに必要な単語を、繰り返し発音させ、慣れさせる。
- ③ ペアで活動し、英語での会話と、単語ではなく文でのやりとりを徹底。
- ④ 学習の中に文字指導の導入となるような活動を取り入れた。
(絵と文字を別々のカードで記して離して置き、児童が組み合わせる活動)

7 成果と課題

- ・ やれそうな気がする。手伝って欲しい。定期的に校内研を開いてほしいという声がたくさん出てきた。
- ・ 時間の確保（研修も授業の時間も）が課題である。
- ・ 個人ではなく、チームで取り組みたい。
- ・ 積み上げは勿論大切であるが、単語については児童にとって、どれも初めて見聞きするものであり、吸収は非常に早いことがわかった。しかし、活用するためには何度も反復練習し、自信を持って発音できるようにしないと主体的な活動には二の足を踏む児童もいる。ネイティブの発音で練習し、フォニックスの活用も大切にしたい。
- ・ ペアでの活動を取り入れることで、単語のみのやりとりや日本語の使用は減らせた。さらに、活動の中では相手の、単語のみの英語や日本語は分からない振りをするように伝え、学級全体で英語 Only の雰囲気を作り上げることができつつある。
- ・ 小学校で700の英単語を学ぶために、中学年の内に300程度を指導しなければならないので、4年生でもどんどん新しい語を学習することになるが、今までに覚えた単語もたくさん織り交ぜることで、安心が生まれ、児童の表情が元気になることがわかった。
- ・ 文字の長さや出だしの音などで考えて、読むことのファーストステップは得られたが、書く活動はできていない。ヘボン式での記名やアルファベットの大文字小文字は指導できたが、今後は、どのように書く活動を取り入り入れていくのか、継続して研究したい。

4 表現の意欲を引き出す外国語活動をめざして

～「知らない言葉」から「使ってみたい言葉」へ～

吉田 元樹

1 研究の目的

小学校外国語活動の学級担任による授業実践をもとに、授業改善という視点からどのようにすれば児童が意欲的に発話を行おうとするのかを、授業者の指導方法から探っていくことを目的とした。

2 研究の方法

授業の展開を以下の4場面の構成で考え、それぞれの場面において児童の発話を促すような指導方法を実践した。また毎週の外国語活動の授業を振り返るために、児童によるふりかえりシート（毎時間）の分析を行った。

① Greeting

あいさつを中心に毎時間同じようなやり取りを繰り返す場面。

② Practicing new words

新語にふれたり、既習の言葉を思い出したりする場面。

③ Practicing activities

言葉の意味を理解し、使えるように準備するための場面。

④ Final tasks

既習の言葉を用いて、外国語によるコミュニケーション活動を行う場面。

3 研究の内容

(1) 児童に安心して発話させるために

① Demonstration

アクティビティーはもちろん、あいさつに至るまで入念にデモンストレーションを行った。授業者どうし→授業者と児童→児童どうしと3段階を設けた。繰り返して見せることによって、自信をもって取り組めるように考えた。(Input)

② Pair work (Group work)

隣の席の人と話したり、班でゲームをしたりと学習をする相手を固定する。慣れてくれば、自分で相手を見つけるようなアクティビティーを行っていった。

③ BGM

児童が会話をする場面では、なるべく音楽を流し自身の声が紛れるように工夫をした。そうすることで自信をもって発話することができると考えた。

(2) 4つの場面における発話を促す指導方法

① Greeting

十分なデモンストレーションのあと、リレー方式やノルマ方式(3人とあいさつをしたら座るなど)であいさつをして、繰り返し練習する。また児童から出た言葉を全体に共有し、少しずつ自由なやりとりを増やしていく。

② Practicing new words

新しい言葉を引き出すための手立てとして、次のようなことを実践した。

- **Picture card** のさまざまな見せ方

ふつうに・ちらっと・すばやく・ジェスチャー・ヒントなどを使って見せる。

- **Realia** (具体物)

身近にあるもの、外来語から想起できるものを見せたり、絵に書いたりする。

- **Eliciting** (引き出す)

授業者が言葉の先頭語だけを発話したり (e...e...elephant)、わざと間違えたり (Cat を見せて Dog というように)、順のある言葉を言いその次を想起させたりする (one, two, three, ???) ことで無理なく言葉を引き出す。

③ Practicing activities

授業者と児童 (**Whole class**) や児童と児童 (**Pair work**・**Small group**) よるやりとりの際、ルールや場面設定を明確にして児童が英語を積極的に使えるように工夫した。

④ Final tasks

①～③の活動をじっくりと行うことで、「知らなかった言葉」は「使ってみたい言葉」となる。単元の導入時に、単元の最後に学ぶ必然性のあるゴールを設定することで、児童の意欲をより一層高めることができると考える。

4 結果

一つひとつの活動に児童が発話したくなるような工夫をすることで、児童が授業に対して意欲的に取り組む姿が多く見られるようになった。4月より12月に至るまで、日々の授業において、3研究内容(2)に記した方法にこだわり実践した。

表より、2学期は1学期に比べ児童の自己評価に上昇が見られた。

	めあての達成		進んで活動		聞く		話す	
	1学期	2学期	1学期	2学期	1学期	2学期	1学期	2学期
Excellent	90%	90%	79%	81%	86%	90%	79%	79%
Good	10%	10%	21%	19%	14%	10%	21%	21%
Bad	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%

5 考察

授業づくりに関して、だれもが参加できるような場をつくるのが最も大切である。何より間違えても受け入れられるような学級集団づくりが必要である。また、良い意味で自由に発言できるように、どのような外国語でもなるべく使おうとしている児童を認めることも大切であった。そうすることで、進んで外国語を使おうとする姿勢が養われたり、わからないことは尋ねてもよいという雰囲気生まれやすかった。最初は言葉を口ずさむ程度の発話であったり、音楽に合わせて体を動かす程度の積極性であったりしたが、さまざまな取り組みをする中でその声は大きくなり、発話に対してさらに積極的になった。最後に、授業者の豊かな表情やジェスチャー・スキットは、児童の外国語によるコミュニケーションをさらに意欲的にするものとなる。授業者が進んで外国語を使う姿や学ぶことを楽しむ姿は、児童の意欲を高める事になり、改めてその必要性を感じた。

5 「パフォーマンステスト」の実施と評価～立体的な評価をめざして～

広瀬 典子

1 はじめに

中学校では、4技能の統合を図りながらコミュニケーション活動を行い、英語で表現したり伝え合ったりする資質・能力を育成することが求められている。特に「話すこと」の活動では、単なる暗記ではなく、場面に応じて「**即興で**」話すことが、新学習指導要領の目標の一つになっている。

研究テーマとして、パフォーマンステストの実施と評価を取り上げ、従来の暗記型の発表や会話ではなく、その場に応じた即興性を少しずつ取り入れた活動を目標に取り組んだ。評価については、個々のスキルを細やかに評価するため、より立体的な評価基準を設定した。生徒へのフィードバックがより具体的になり活動への意欲を高める材料となることを目標とした。

2 授業の形態(3年生)

週4時間－教科書内容の授業(週3回)、NETとの授業(週1回)。担当教員は各1名。

内容	教科書本文	教科書の Let's Talk, speech
担当教員	3年英語科1名	他学年英語科1名+NET
1週間当たりの授業	週3時間	週1時間
パフォーマンステスト	音読テスト	会話・インタビュー・スピーチ

- ・NETとの授業(週1)で、課題ごとにパフォーマンステストを実施する。
- ・年間を通して speaking と writing でまとまりのある英語を表現する練習をする。

3 方法と内容

(1) 方法

目標・評価基準の提示 ➡ 学習 ➡ パフォーマンステスト ➡ フィードバック

(2) 内容

タイトル	時期	発表形式
① 道案内(Talk 1)	5月	ペア会話
② 病状をたずねる(Talk 2)	6月	ペア会話
③ 有名人へのインタビュー(Project 1)	7・8月	個人・グループでのインタビュー
④ 買い物(Talk 3)	10月	ペア会話
⑤ 食べ物をすすめる(Talk 4)	9月	ペア会話
⑥ おすすめの国紹介	12・1月	スピーチ
⑦ 電話(Talk 5)	11月	スキット作り

4 活動例(即興性を取り入れたテスト)

①道案内(Talk 1)

- ・種類の違う地図を6種類用意する。6つのパターンでペア練習する。
- ・テストでは、6つの中から、1つをその場で提示し会話をする。

④買い物(Talk 3)

- ・アイテム6つを練習し、苦情と値段はその場で考えてテストを受ける。

③有名人へのインタビュー

- ・4人グループでインタビューする側になり練習する。
- ・テストでは、NETがインタビューされる有名人になり、グループで協力して4分以上インタビューを続ける。

⑥おすすめの国紹介

- ・スピーチの後、その内容に関して、NETから2つ質問があり、それに答える。

5 評価例

(1) よくある評価例：

発音・イントネーション	文法・正確さ	内容	態度	総合評価
A・B・C・D	A・B・C・D	A・B・C・D	A・B・C・D	A・B・C・D

問題点：それぞれの評価が違って、結局は総合評価1つになる

生徒は…「せっかく発音ががんばったのに、文法がダメならCなのか…がっかり」

(2) 今回の評価例：各観点の到達目標を事前に提示。(資料1)

①内容	A(5点)	B(3点)	C(1点)	F(0点)	5点満点	計20点
②正確さ	A(5点)	B(3点)	C(1点)	F(0点)	5点満点	
③流暢さ	A(5点)	B(3点)	C(1点)	F(0点)	5点満点	
④態度	A(5点)	B(3点)	C(1点)	F(0点)	5点満点	

改善点：それぞれの観点の評価があり、出来たとところと不十分なところがよくわかる。

また、評価は個々のスキルを反映した点数になっているのでやる気につながる。

6 成果と課題

(1) 成果

年間通じて継続して取り組み、頑張って練習すればできるようになるという意識が高まった。その結果生徒が一生懸命練習し、テストに臨むようになった。

(2) 課題

①練習や暗唱を土台として、即興性を取り入れたテストを少しずつ模索したが、本当の意味での即興性を取り入れるにはまだまだ工夫が必要である。

②評価を正確に行うには、録画など、NETだけでなく2人体制で判断する必要がある、手間がかかる。

「生徒がその場面に遭遇した時、使えるかどうか」を大切に指導をしている。生徒が少しでも「使ってみよう！」と思えるような活動展開ができるよう工夫していきたい。

6 文字指導を続けて見えたこと

北村 花菜

1 はじめに

新学習指導要領で重視される言語活動は、外国語活動や外国語科における核である。そのため、本校では「聞くこと」の言語活動として、3・4年ではアルファベットカードなどを用いて、英語の音声に慣れ親しむ活動を継続的に行ってきた。また、「書くこと」の言語活動として、5・6年ではアルファベットカードや四線を使い、書き写す活動に取り組んできた。

2 指導方法・内容

(1) 第3学年

3年生では、アルファベットへの文字の慣れ親しみに向けて授業を継続的に行った。

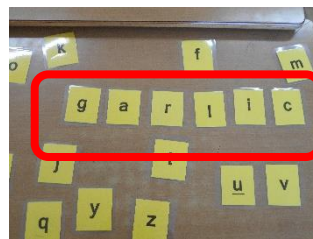
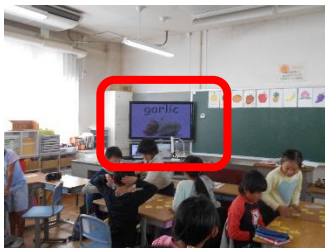
内容①アルファベットソング

②アルファベトリズム

③アルファベットカードオーダリング（大文字、小文字）

④アルファベットカルタ取り

⑤単語作り



慣れ親しみのため、発音した後に同じ文字を見せアルファベットの読み方や文字を覚えるのではなく、形がわかることを意識して授業作づくりを行った。

(2) 第5学年

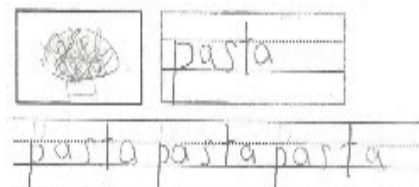
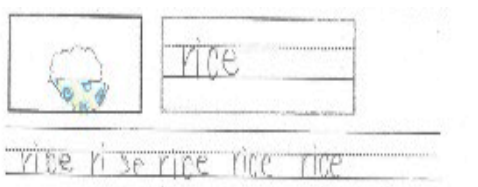
5年生では、中学年より進めて、アルファベットを「書く」指導を継続的に行った。

内容 外国語活動の授業の最初に「もじもじタイム」を導入した。

① アルファベット単語作り

② アルファベット 記入

アルファベットの記入では、四線の上でなぞるではなく、書き写すことを意識させて行った。また音と文字をつなげられるように単語を書いた後は発音することも徹底した。



3 「書く」についてのアンケート(第5学年)

① 最初と比べ、英語は書けるようになりましたか。また、どんなときに書けるようになったと思いますか。

	人数	理由
書ける	28人	・ 単語を書くときに迷いがなくなった。 ・ 小文字の苦手がなくなった。 ・ 英語が身の回りにあった時に自然に書いていることがある。 ・ 単語を言われて、なんとなく書けるようになった。
書けない	5人	

② 最初と比べ、読めるようになりましたか。

	人数
読める	31人
読めない	2人

英語は書けないが、読めるようになった児童が3人みられた。

③ 英語を書くことは楽しいですか。

	人数
楽しい	26人
楽しくない	7人

④ 習った英語を授業以外で活用したいと思いますか。

	人数
思う	30人
思わない	3人

「英語を書くこと、読むことはできない。」と答えた児童も活用はしたいと思うと書いていた。「書けることや読めること」と「活用したい気持ち」は別だと考えられた。

4 成果と課題

(1) 成果

中学年の「聞くこと」の言語活動では、音やゲームなどを取り入れることで、アルファベットに慣れ親しませた。結果として、児童が自然にアルファベットを身につけることができた。

書く指導を何度も繰り返し行うことで、書くことへの抵抗がなくなり、スムーズに書ける児童が増えてきた。また、書く指導とともに読む指導を行うことで、英語の発音と文字をつなげて覚えることが出来たように感じる。

また、高学年における「書くこと」の言語活動が学習意欲の低下につながらないかと不安視したが、工夫した活動を行ってきたので、授業の楽しさや英語への意欲を継続することができた。

(2) 展望

文字の指導はこれまで授業の中で、単独で行われることが多かった。今後、授業の流れの中で取り入れ、文字の必然性を感じられるような教材研究を行っていきたい。また、子どもたちが主体的に外国語に取り組んでいける授業を考えていきたい。

7 算数の時間に無理なく英語

～外国語活動の時間以外の外国語活動～

竹内 智哉

1 はじめに

今年度、少人数指導として3・4年生の算数を教えることになった。英語の授業とは直接的な接点がなく、英語のことを深く考えることなく1年が過ぎるところが、幸いにも深く考える機会に恵まれた。少人数指導の立場で自然な形でできることがないか考え、1年を通して、外国語活動の時間に捉われず、算数の時間に無理なく英語をどこまで使うことができるか考えていくことにした。

算数の時間に英語を使う前提として、以下の3点に留意した。

- (1) 英語の文章や単語の反復練習などはしない
- (2) 教科の学習に支障が出ないようにする
- (3) 長文にならないようにする

教員も児童も授業でよく使う英語の表現に慣れておくことで、英語の時間のめあてに集中できるようになるだろう。

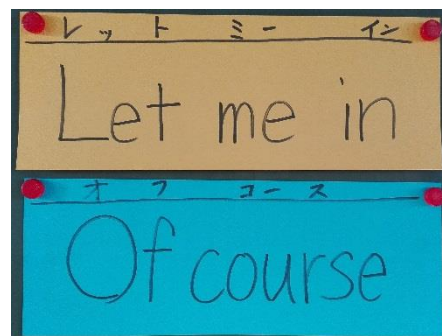
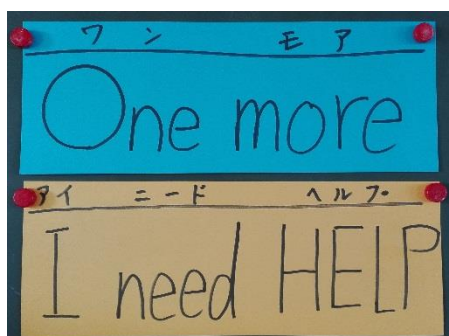
2 取組み

まず、NETの先生がよく使う“Are you ready?”や“Here you are.”などの表現を取り入れた。3・4年生ということで、こちらが英語で聞くと、児童も自然と英語で返していた。それらのやり取りに慣れてきたら、新しい表現を取り入れていき、英語でのやりとりが増えるようにした。

算数は授業の流れがある程度決まっているので、まず学習事項の定着を目指し、児童が慣れてきたら、簡単な表現から英語に変えていった。例えば、あいさつをする、ノートや教科書を開く、プリントをくばる、問題を読む、考える、はじめる…。授業の最初から英語を使っていくと表現に迷う部分が出るので、教師があらかじめその文章を覚えておき、英語で進められる時間を少しずつ増やしていった。

ページを伝えるとき最初は英語で言い、次に“**One-Seven-One**”という表現に変え、最後には日本語で言う。“**How many?**”と聞くととき“**Three?Four?**”と聞き、数を聞かれていることが伝わるようにし、直前に聞いた単語を繰り返せばいいようにした。

英語をより意識できるように掲示物を用意し、授業中にも目に入るようにした。



3 成果と課題

算数の授業準備に時間を取られ、英語まで手がまわらなかった。研究員でなければ英語について考える時間すらとろうとしていなかったのではないかと思う。1年間にわたり英語について考えていく中で、普段から英語を使うために、以下の3点が大切だと感じた。

(1) 教員と児童の気持ちの余裕

英語を使おうと思っても児童が落ち着いていない場合や、逆に児童は落ち着いていても教員側の気持ち的な準備不足で使えないことがあった。教員側の気持ちの準備という点では、1日を通じて関わる担任の教員よりも、少人数指導の方が使いやすかったかもしれない。

(2) 普段から落ち着いて学習できる環境

基本的なルールの定着の重要性を感じた。単純な音としてではなく、言語として英語を扱っていけるような雰囲気づくりを心掛けたい。

(3) 教員の英語を使おうという意識

授業中に「これを英語で言いたい」と思うことがあっても、実際に調べる前に忘れてしまっていることが多かった。できるだけわかりやすい表現を意識したが、どうしても長くなることがあった。その際は、児童にとって英語を聞いているというよりも、教員が外国語で何かを言っている状態になってしまうので、さらなる工夫が必要だと感じた。

継続して続けていると、休み時間に知っている単語をひねり出して自分の言いたいことを伝えようとしている児童の姿が見られた。表現として完成していないものも多々あるだろうが、英語に対して肯定的な感情を持っていると、自分で単語を補っていける機会も増えるだろう。英語でのやりとりが増えれば児童の自信に繋がり、教員の英語への意識もより一層深まるように感じた。

4 使っていた英語表現

“Stand up.”	立ちましょう
“Sit down.”	すわりましょう
“Let’s start.”	はじめましょう
“Open your notebook page ~.”	～ページを開きましょう
“What’s date is it today?”	今日は何日ですか
“Put on your note with glue.”	ノートにのりで貼りましょう
“Are you ready?”	準備はできましたか
“One more.”	もう一度
“How many?”	いくつですか
“Here you are.”	どうぞ
“Let’s read.”	読みましょう
“Let’s thinking.”	考えましょう